



園だより

令和3年1月12日
佛教大学附属幼稚園

「仏教保育1月のねらい」

わげんあいご
和顔愛語

「丑年のはじめに」

園長 佐藤 和順

新年あけましておめでとうございます。新しい生活様式の中で、例年とは違ったお正月の過ごし方となった方も多かったことでしょう。

旧年中は園の運営に関しまして、多大なるご理解、ご協力をいただきありがとうございました。今年も園児が笑顔で充実した園生活が送れるよう教職員一同力を合わせて参りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

今年が丑年です。牛は昔から食料としてだけでなく、農作物や物を運ぶ時の労働力として、人間の生活に欠かせない動物でした。よく働く姿が「勤勉さ」を象徴し、身近にいる縁起の良い動物として十二支に加えられたそうです。また「紐」という漢字に「丑」の字が使われていることから分かるように、「結ぶ」や「つかむ」などの意味も込められているようです。

さて、今月の保育目標は「和顔愛語(わげんあいご)寒さに負けず仲良く遊ぼう」です。寒いとき、つらいとき、悲しいとき、くじけてずっと情けない顔をしてはいけません。どんなときでも笑顔を忘れず、仲良くしていきましょうということです。「和顔」には穏やかな表情、「愛語」には心やさしい言葉という意味があります。和やかな笑顔と、思いやりのある話し方で人に接することが大切だということです。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、現在私たちの生活には制限があり、不自由を感じることもあります。そのことに不満を感じ、イライラが募ることもあるでしょう。不機嫌な時にはなかなか笑顔になれないものです。機嫌の悪さは行動や言葉となり、自分一人に留まらず、周囲の人に伝わってしまいます。反対に周囲の人の機嫌の悪さも自分に伝わり、楽しい気分が損なわれることもあるでしょう。機嫌の悪さが周囲に伝わるのであれば、機嫌の良さも同じく周囲に伝わるはずで、機嫌の悪さを周囲にばらまくよりも、機嫌の良さを周囲と共有したほうが良いに決まっています。心に余裕がなければ難しいことですが、今のこの状況下だからこそ「和顔愛語」を忘れないようにしたいものです。すぐに笑顔や優しい言葉がけが、身につくものではないかもしれませんが、その努力をするところにこそ、大きな意味があります。

十二支の中で最も動きが緩慢で歩みの遅い丑の年は、先を急がず一歩一歩着実に進めることが大切な年ともいわれています。努力を怠らなければ成果が上がることのとたとえである「牛の歩みも千里」という言葉もあるように、少しずつでも忘れずに心掛けたいものです。

